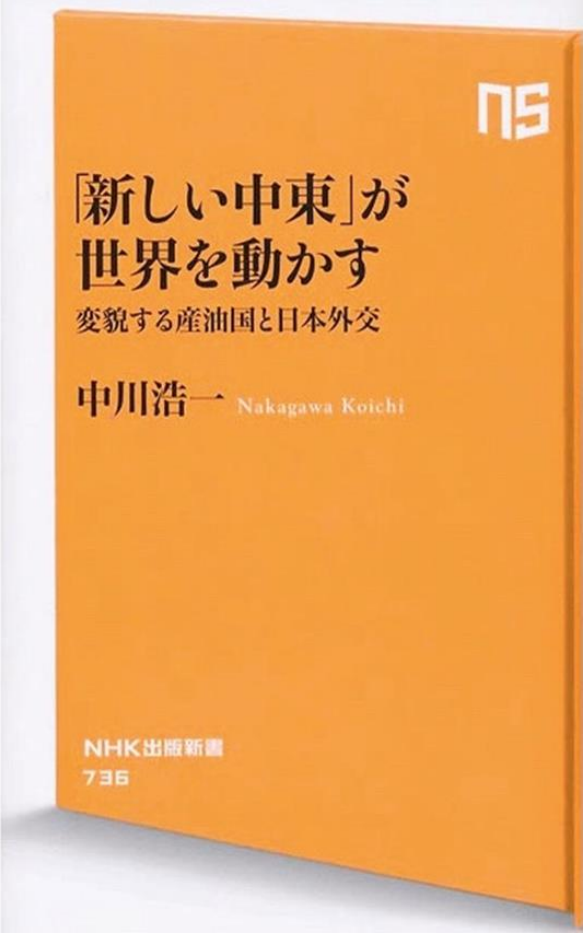
タイトル：「新しい中東」が世界を動かす
変貌する産油国と日本外交 （全 208 ページ）
発行所：NHK 出版
発行：2025 年 1 月 10 日　第1刷発行



著者；中川浩一 （ナカガワ　コウイチ）
1969 年生まれ、慶應義塾大学卒業後、94年外務省入省。在イスラエル日本国大使館、対パレスチナ日本政府代表事務所（ガザ）、PLOアラファト議長の通訳、天皇陛下や総理大臣のアラビア語通訳官などを経て、2020年外務省退職。現在、国内シンクタンク主席研究員、ビジネスコンサルタント

内容概略
　脱炭素など「新しい中東」の様相を明らかにするとともに、その国家戦略が国際社会に与える影響をレポート。中東にエネルギーの95%を依存する日本が、これから進むべき道を大胆に提言する。地を這う外交、アートのような外交が必要。

内容
第1章　日本人が知らない「新しい中東」
1.「混沌」と「喧噪」のアラブ世界
　外務省に入省し、アラビア語をゼロから習得。テレビのニュース、新聞で使われるアラビア語と市中での話し言葉が異なる。秩序のない社会。
2. アラブ世界を象徴する三つの言葉
　すべては「神のおぼしめし」、今日できる子 t は明日やればよばいい、「謝ったら負け」の世界四つの言語圏；アラビア語、ヘブライ語、ペルシャ語、トルコ語
　三つの宗教；イスラム教、ユダヤ教、キリスト教

3. 見方を狭める「語学の罠」アラビア語という入口、イスラエル（経済力）、イラン（ペルシャが上の意識）、アメリカ在住のユダヤ人
4. 中東で展開される「洗脳合戦」 イスラエルの外交により日本がハマスの攻撃を「テロ」と認定、誰もが正しくて、誰もが正しくない世界
5. 変貌を遂げるアラブ世界　若きリーダーたちの台頭：サウジのムハンマド皇太子、
「豊かさ」の度合いに差（UAE、パレスチナ、イエメン）、中東依存国家・日本が安定的に中東から原油を輸入できてきたのは、日本の平和外交、官民による関係づくり、中東を知ることは「教養」ではなく、生活を守る「手段」

第2章　原油はいつまで「最強のカード」か？

1. 原油が生み出す膨大な富　石油輸出による富をメジャーと産油国政府で折半とした。サウジ、UAE には貧困層なし。ドバイは UAE を構成する首長国だが石油がほとんど採れないため、徹底的に観光に力を入れて大都市に成長。エジプト経済は不安定なまま。
2. 外交カードとしての原油　人権をとるか、石油をとるか、バイデン大統領はサウジアラビア人ジャーナリスト、ジャマル・カショギ氏殺害事件の首謀者としたムハンマド皇太子に石油増産を依頼。サウジはその半年後に石油を大幅減産（アメリカに対する意趣返し）。サウジと中国の蜜月
3. 「脱石油」時代の新潮流
UAE のドバイで COP28 が開催、脱炭素を段階的に進めたいとの思惑。天然資源に基づく収入に頼る「レンティア経済」からの脱却。アメリカでシェール革命により石油生産が増大し、サウジに対する石油依存の必要性が低下し、サウジに対する石油のための軍事協力の必要性が低下。中東諸国はアメリカに頼らない国家運営が急務となった。
脱石油依存プロジェクト：NEOM（SINDALAH 紅海に浮かぶ超高級リゾートアイランド, TROJENA 山岳リゾート, OXAGON 水上産業都市, THE LINE 見ないの都市の新たな定義）
脱石油は、湾岸諸国と日本の共通の目標「日本・サウジ・ビジョン 2030」
4. 湾岸諸国から見た日本　NEOM はプロジェクトが巨大すぎて、日本が及び腰。湾岸諸国からは「一方的な貿易だけでなく、もっと多角的な関係を活性化させたい」、日本は中東に関心が低い。

第3章　敗北を繰り返す日本外交

1. 中東外交に歴史あり　第4次中東戦争で始まった第一次オイルショックで、当初日本はイスラエル寄りの「非友好国」とされたが、官民で外交努力によって、2 ヶ月後に OPEC は日本を「友好国」とする決議を行なった。
「チャイナスクール」、「ロシアンスクール」はあるが、「アラビアンスクール」はなく、個人を指す「アラビスト」が使われる。（アラブの国々は連帯ができていない、アラビア語を学ぶ者の同じ）
2. 日本外交史に残る汚点　1991 年の湾岸戦争で、日本は「金だけだして人は出さない」（130 億ドル）（外交史の大きな禍根） クウェートでは 200 人以上がイラク政府に人質として拘束された。ワシントン・ポスト紙の支援国の内に日本はなし。「外交敗北」＞「顔の見える外交」Show the flag 、その後、総合外交政策局が設立、PKO への自衛隊派遣（1992 年）、アフガン戦争（2001 年）、イラク戦争（2003 年）に対応。
3. 自衛隊海外派遣の真相
小泉首相はイラク戦争開戦直後に、ブッシュ大統領に戦争支持を明確に伝えた。自衛隊が派遣されたサマワは非戦闘地域か？小泉首相「自衛隊が活動している地域が『非戦闘地域』だ」と答弁。自衛隊は安全なサモアで、外交官は治安の悪いバクダットで命懸けで業務遂行。2003 年 11 月に、バクダット北部で外交官の奥克彦参事官と井ノ上正盛書記官が銃撃され落命。
その後、イラクから、多くの要人が来日。
4. 他国から見た日本外交　日本国内での中東に対する関心の低さ。他国からは日本の外交官は「日本人の命さえ守られればいい」と見られる。「日本は違う」と他国に説明することも外交官の役割だが、普通ではないなと思われている。2015 年、安全保障関連法で自衛隊が米軍と海外で共同活動に従事が可能に。
5. 教訓を未来へとつなぐために　中東に大変関心の高い河野外務大臣によるスピーチ、「河野四箇条」
1）知的・人的貢献、2）「人」への投資、3）息の長い取り組み、4）政治的取り組みの強化

第4章　内側から見た外務省

1. 強烈な序列社会　専門職（II 種）で入省、階級社会
2. 問題だらけの外務省人事　専門を極めた人ほど外務省を辞めていく　錆びついた国家公務員制度
3. 外務省に求められる改革　現地語を話せなくとも大使になれる？　幅を利かせる「英語のキャリア」（国民の関心が低い）中東に赴任する外交官の嘆き
4. どこから変えていくべきか　安倍首相による「地球儀を俯瞰する外交」は画期的、全ての国をフラットに見る

第5章　日本外交が持つ可能性

1.「脱アメリカ依存」は可能か　2011 年に始まったシリア危機に対して「アメリカは世界の警察官でない」オバマ大統領（2013 年）、その翌年 2014 年ロシアがクリミア半島を併合
2. 日本外交が目指すべき道　日本にしかできない外交、アメリカによる「民主主義サミット」は世界に分断をもたらしている。日本は分断を抑えるべき。中国、ロシアとのパイプを維持すること。「地を這う外交」で相手にすっと手を差し伸べ相手に寄り添うこと。
3. 国際情勢から見た日本の国益　国益を守るために、イスラエルとパレスチナに対して、支持の立場（旗色）を明確にする必要はない。イランとの関係も維持すること。「立場を表明しない」という立場　国益を起点とする外交　ウクライナよりもガザ復興が日本に期待されている。アートとしての外交が必要。